

2009年5月29日現在

研究種目：基盤研究（C）一般

研究期間：2006～2008

課題番号：18520436

研究課題名（和文）社会文化的アプローチにもとづく英語科教師の学びに関する研究

研究課題名（英文）A Socio-cultural Approach to Japanese EFL Teachers' Learning

研究代表者 吉田 達弘（YOSHIDA TATSUHIRO）

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：10240293

研究成果の概要：

本研究では、社会文化的アプローチを基礎理論として、英語教師の学びについて新しい研究の枠組みを提供し、英語教師の学び・成長を支援する教師教育の方法や環境の開発を行った。具体的には、(1)社会文化的アプローチを援用した英語教師教育の基礎理論の研究、(2)英語教師の学びと成長を支援するポートフォリオの開発、(3)英語教師教育方法論としてのナラティブ・アプローチの研究、という課題に取り組んだ。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	400,000	120,000	520,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	330,000	2,030,000

研究分野：英語教育学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育，社会文化的アプローチ，教師教育，ポートフォリオ，ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

文部科学省が2003年に『「英語が使える」日本人を育成するための行動計画』を発表して以来、英語教師の資質、指導力の向上に関する施策が明確に打ち出された。これにともなって2003年度から5カ年計画で、中学校及び高等学校の全英語科教員に10日間の研修が義務づけられた。このように英語科教員の資質向上に関して、国・地方レベルで様々な研修が実施されたが、多くの研修が英語運用力と指導技術向上に力点を置く一斉研修形式で行われる短期間のものであった。このような研修が、教師の反省的な実践を促し、また、そういった自律した教師を育てる機会を提供したかについては、検討の余地がある。

一方、わが国の教師教育研究は、従来から、

教師の専門的知識、指導力、子ども理解などの分野に細分化された還元主義的な枠組みにもとづいて行われてきており、教師の経験、認識などを全体としてとらえ、研究の対象とする研究はごくわずかしかなかった。こういった課題を克服するために、ドナルド・ショーンの「反省的实践家」という概念が早くから紹介され、個人の実践と省察と対話によって自らの実践をとらえていく枠組みが示されたが、英語科教師教育においては、このような枠組みにもとづいた行われる教師教育の取組みはまだ少ない。

また、英語教師研究では、「アクション・リサーチ」という研究手法が、他教科の実践研究よりも早い時期から導入されているが、これまで行われてきたアクション・リサーチ

の研究事例を見ると、仮説検証型の手法が推奨されており、前述した要素還元主義、あるいは、実証主義的な色合いが強く、本来的な教師の学びに対して有効な手段であるかどうか疑問が残る。

一方、海外では、それまでの実証主義的な言語教育研究、あるいは、言語教師教育研究への反省から、後述する社会文化的アプローチによる研究の枠組みが提唱された(Lantolf, 2000, Lantolf & Thorn, 2006; Johnson, 2007)であり、学習を個人の心理学的メカニズムに還元してとらえたり、結果としての学習や教授の効果を定量化して捉える従来の研究の枠組みとは異なる研究のあり方が示された。わが国でもこのような動きを見ながら、教師教育のあり方について、新しい方向性を提示する時期に来ている。

2. 研究の目的

本研究では、上述した背景から発生している課題を解決するために、社会文化的アプローチを援用し、英語教員の学びの研究に新しい視座を与えることを目的とした。この枠組みでは、英語教師の学びや知識を、特定の能力に細分化して捉える還元主義的な見方ではなく、社会文化的アプローチの枠組みを援用し、分析を行う。つまり、個々の英語教師がどのように学びの歴史をもっているか、どのような状況（コンテキスト）で教え、その状況をどのように理解しているのか、また、ライフステージによって英語科授業のとらえ方がどのように変容するのか、ということ射程に入れて研究を進めることとなる。後述するが、その方法として教師が自らの実践を語り、対象化することで学びを深めるナラティブ・アプローチによる教師教育方法を開発することを目指す。教師自らが自分の実践や学びを語り、また、特定の事例に関する他者の語りから学ぶことによって、教師自らの成長を促進する教師教育の方法論、環境を開発する。

上記の目的を、以下の3つの研究課題として掲げる。

課題1 社会文化的アプローチを援用した英語教師教育の基礎理論の研究

課題2 英語教師の学びと成長を支援する学習環境の開発

課題3 英語教師の学びと成長を支援する教師教育方法論としてのナラティブ・アプローチの研究

3. 研究の方法

上記の課題1については、近年、海外で研究がすすんでいる社会文化的アプローチを援用した教師教育の研究についての文献研究を行い、同アプローチを援用した英語教師教

育の基礎理論を考察する。課題2に対しては、大学院に在籍する現職英語教師が自らの学びを振り返ることができるように、ポートフォリオのシステムを構築する。ポートフォリオは、ファイルに学習したことやその振り返りを蓄積する紙版と、インターネット上のコンテンツ・マネジメント・システム(CMS)に蓄積する電子版を準備する。この2つのタイプのポートフォリオに蓄積されたデータの分析を課題3として取り組む。近年、活発に研究がすすんでいるナラティブ・アプローチの手法を吟味し、上記のポートフォリオに蓄積されたデータを分析する。この分析にもとづき英語教師の学びについてのグラウンディッドな理論の構築を進める。

4. 研究成果

上記の課題1～3に対する成果を以下に述べる。

(1) 課題1 社会文化的アプローチを援用した英語教師教育の基礎理論の研究

①授業研究や教師研究の流れ

授業研究や教師研究は1970年代に本格的に始まったが、当時は、行動主義的な学習観が背景にあり、研究の関心は、観察可能な教師行動が生徒の学習にどのように影響を与えるのかにあった。したがって、ある教師の行動の背後に、どのような考えがあったかということには関心が向けられることはなく、教師はいわば「ブラックボックス」であった。80年代になり、言語学や心理学研究の領域で「認知革命」がおき、認知科学が誕生した。授業研究や教師研究にもその影響が及び、観察可能な教師の行動面ばかりでなく、教師の内面、認知に焦点が当てられるようになった。しかし、当初は、教師が持っている教科に関する内容知識(content knowledge)と指導実践および学習成果の関係に目が向けられていた。つまり、教師がどのような知識をどれだけ持っていればいいのか、その知識をどのように使えばいいのか研究の対象であった。やがて、研究の関心は、教師の持っている内容知識から、授業のさまざまな場面での振る舞いの背後にある意志決定に移った。これは、教師自身の内省が利用されることによって可能になったのだが、90年代には、そのような教師の認知プロセスの研究が多数行われた(例えば、Woods, 1999)。

教師の意志決定や認知に関する研究によって明らかになったことは、実践における教師の認知の複雑さであった。つまり、教師は授業に対して抽象的、一般的な理解を持つというより状況に依存した理解を持っていること、その理解や意志決定には、その教師の学習歴や経験が大きく影響を及ぼしていること、また、実践を行う文脈の範囲も、教師

-生徒のインタラクションに限定せず、教室や学校を取り囲む社会政治的あるいは社会文化的な要因にまで広げて考えていく必要性があることが明らかになってきた。

② 社会文化的アプローチによる学習・発達研究

90年代に入る頃に、北米やヨーロッパでは、認知や学習、発達研究において新たな研究の流れが起き始めていた。ヴィゴツキーの発達理論を基にしてマイケル・コールやジム・ワーチらによってすすめられた社会文化的アプローチと呼ばれる研究の流れである。この研究の枠組みでは、個人の心的処理として考えられていた学習や認知が、学習者が埋め込まれた状況やコンテキストのインタラクションで起こっていること、また、我々の認知や学習は道具による媒介によってなされること、また、知識獲得あるいは内在化としてとらえられていた学習も、学習者個人のアイデンティティの変容として捉えられたり、あるいは、実践共同体への参加として捉えられたりするようになってきた(Lave & Wenger, 1991)。また、学習の文脈も個人という単位から、文脈まで含めた個人の活動が研究の単位となり、社会経済的な文脈あるいは社会文化的文脈へと拡大されるようになった。

一方、海外の第二言語および外国語教育研究でも社会文化的アプローチが大きな流れを作りつつある(Lantolf, 2000; Lantolf & Thorn, 2006 など)が Karen Johnson は、TESOL Quarterly の40周年号で執筆した論文の中で、このような研究の流れを「社会文化的転回(sociocultural turn)」と呼び、学習や発達研究において発生した「社会文化的転回」が、最近の、そして今後の英語教師教育の理論的背景になると考えている。その際に、教師教育が直面する課題として、次の4つをあげている。

1. 実践/理論と Praxis
2. 教師の知のあり方の正当化
3. 専門的の力量形成の境界線の引き直し
4. 場に根付いた教師教育の推進

(Johnson, 2007)

以下では、紙幅の都合上、特に1と2の課題について検討する。

③ 教師の知のあり方と praxis

これまでの英語教育における研究と実践の関係は、Freeman (1998)が示すように、研究者が知を生み出し、教師がそれを実行する、あるいは、消費するという関係にあった。しかし、このような関係では教室におけるさまざまな問題は解決できず、教師の理論への不信感、あるいは、「理論拒否症候群」を生み出してきた。

一方、「社会文化的転回」によって、実践

現場の当事者としての教師の知のあり方が、重視される方向へと動き始めていている。この枠組みでは、教師は複雑な実践の状況を理解しているインサイダーであり、イーミック(emic)な知を持っているとされる。また、状況の理解も単純でなく、複雑で多層的であるということ、また、教師たちの「生きた経験(lived experience)」を語る言葉は非常にパワフルであることも指摘されており、教師によるナラティブ研究もすすんできている(Johnson & Glombek, 2004)。

このような枠組みの中での教師による研究は、研究者が主張する既成の理論についての妥当性を仮説検証するやり方ではなく、教師が実践において抱く inquiry (Freeman, 1998) や puzzles (Allwright, 2003)からはじまること、また、inquiry や puzzles を教室の問題(problem)とし、それを解決・改善するのではなく、状況の理解(understanding)が優先されるべきだということが多くの研究者や教師教育者から提唱されている。Freeman らのリフレクティブ・アプローチ、Johnson & Glombek (2004)のナラティブ・アプローチ、また、Allwright (2003)らが提唱する探求の実践(Exploratory Practice)などはその例である。

このように、教師の実践知のあり方が重視されると、教師の立場は、理論の消費者から、知識や理論を生成する立場へと変容する。つまり、実践そのものを生きる立場とその実践をインサイダーとして探求するという二重性の中に教師は生きることになる。Freeman (1998)は、こういった教師を teacher-researcher と呼び、Fine (1996)に言及しながら次のように述べている。

Teacher-researcher is the story of two nouns joined by a hyphen; being a teacher-researcher means working at that hyphen.(p.5)

さらに、Johnson (2006)は、研究の質を高めていくには、教師の経験や声を単に集めるだけでは十分ではないと主張し、教師の puzzles や inquiry, そして、そこから自らが生み出した理論は、専門家・研究者による知と理論によって意味づけられたり、逆に、専門家の理論を批判的に考察しながら、自らの理論の質を高めていく必要があると述べている。つまり、対話的な(dialogic)なプロセスが関与しなければならないのである(Johnson, 2004)。

例えば、言語学習における情報の流れを示す「インプット」、「アウトプット」という用語は、今や英語教師の間では、日常語に近い形で使用されているが、これらの用語が、心理過程過程を説明する認知心理学研究で使用された用語であり、もともと単純な計算機の処理過程を表す表現を期限にしていることはほとんど意識されない。ところが、実際、

教室で生徒たちが言語活動に取り組む様子やそこでのコミュニケーションの有様を観察していると、インプット→アウトプットという単純な情報の流れで説明することができないほど、豊かで複雑な場面にしばしば出くわす。インプット、アウトプットという用語は、複雑な学習を単純化するのには便利かもしれないが、学習者がどのような文脈で、どのような学習の履歴、他者や教材や道具との関係の中で学んでいるかについては、十分に説明することはできない。このように、市民権を得た（あるいは、得つつある）専門用語とその背後にある心理学、言語学理論の前提に対して、意識的になることで、無批判に専門用語を使い、実は、非常に豊かな実践の様子を覆い隠してしまうことを避けることができる。

Johnson (2004, 2006)は、教師が既成の理論の意味づけを行い、批判的になっていく行為を社会学で用いられている praxis (フレイレ, 1979)という概念を援用して説明している。Johnson は、実践家と研究者の間に praxis を成立させた一つの形として Sharkey & Johnson (2003)を挙げている。Sharkey & Johnson (2003)は、専門誌である TESOL Quarterly に掲載された過去の論文を巡って、論文の執筆者(研究者)とその読者(教師)たちとの対話を集めたものである。研究者は論文を通して、専門家の知(expert knowledge)を提示する。それに対して読み手(TQ readers)は次のような読み方で対応した。

TQ readers actively link this expert knowledge to their own experiential knowledge as they reframe the way they describe and interpret their lived experiences. These new understandings enable TQ readers to reorganize their experiential knowledge, and this reorganization creates a new lens through which they interpret their understandings of themselves and their classroom practices. (p.240)

Johnson は、教師が新たに得た理解、経験的知識の再構成、新しい見方の形成が praxis であり、教師の専門性(expertise)の一形式だとしている。

… praxis, as a form of expertise, has a great deal of experiential knowledge in it, but it is organized around and transformed through theoretical knowledge. (p.240)

本研究では、上記の議論を踏まえ、praxis を可能にする教師教育の実現、また、教師が自らの学びと成長を支援するシステムを開発する。

(2) 課題 2 英語教師の学びと成長を支援する学習環境の開発

① Learning Portfolio (紙版) の作成

前述の議論を踏まえ、筆者が勤務校で平成18年度に担当した「英語科カリキュラムデザイン論」の中でポートフォリオの作成を課題として学生に与えた。この授業では、「カリキュラム」という概念を単に「年間計画」と捉えず、広く教育実践を捉える概念として理解し、自らの実践を振り返ることを目標として取り組んでいった。そして、学期末に、学習成果を振り返るために、それまでに提出した課題レポートをファイルにとりまとめ、振り返る Learning Portfolio という課題が与えられた。受講した学生は、現職教員の学生、教職未経験の学生であったが、学生の Learning Portfolio に綴られた振り返りの文章を分析すると、自らの経験、知識、あるいは、大学で学んだ専門知を巡って、さまざまなやり方を通して振り返る様子が明らかとなった。

② 電子ポートフォリオの作成

①では、紙版のポートフォリオによって、教師の学びを振り返るシステムを構築した。紙版のメリットは、どこでも持ち運べること、手書きのメモなどが添付できるなど加工しやすい点にある。一方で、保存や保管の問題、あるいは、授業担当者とのやりとりに時間がかかるなどのデメリットもあった。そこで、本取組のためにウェブサーバを構築し、そこに、Moodle と呼ばれるコンテンツ・マネジメント・システム(CMS)を導入し、電子ポートフォリオのシステム構築を試みた。Moodle は、世界中の大学や学校で授業やコースの運営管理を行うウェブアプリケーションとして利用されているオープン・ソースのシステムである。本研究では、Moodle v.1.7 をサーバにインストールし、平成 20 年度の大学院担当科目である「英語科カリキュラムデザイン論」で活用した。

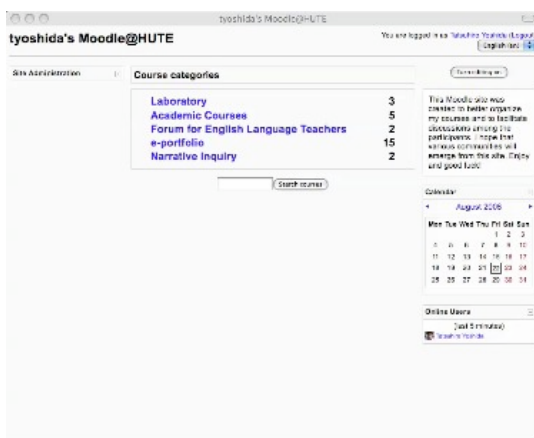


図1 Moodleを利用した電子ポートフォリオ

授業で Moodle を活用する場合、担当教員が作成した授業用の「コース」に対して、学生はアクセスすることを許可され、投稿、課題のアップロード、資料のダウンロードなどを行う。今回は、学生一人ひとりが自分のポートフォリオを持つことになるため、授業に参加する学生一人ひとりに「コース」の管理者になってもらった。そして、コースのレイアウトを自由にデザインしたり、自らの振りかえりを適宜アップロードできるなど自由度の高い操作環境を準備した。

電子ポートフォリオでも、紙版ポートフォリオの取組と同様に、授業の様々な課題やアクション・ペーパーを電子ファイルとしてアップロードし、学期の終わりにそのファイルを再度読み、自らの成長や意識の変容を言語化することを行った。

(3) 課題 3 英語教師の学びと成長を支援する教師教育方法論としてのナラティブ・アプローチの研究

① ナラティブ・アプローチ

近年、教師教育研究では、教師の知や経験をナラティブとしてとらえ、また、研究方法としてナラティブを研究方法として利用するナラティブ・アプローチが重要視されている(Clandinin & Connelly, 2000; Johnson & Glombek, 2003)。ナラティブ・アプローチとは、教師自身が、ジャーナルに綴ったり、インタビューに答えるなどして教室の出来事や経験を記述し、それを解釈、意味づけすることで、教師と生徒の学びの有様や自分自身の成長の軌跡を明らかにする方法である。

ナラティブ・アプローチで重要なことは、教室の現象の客観的な記述にとどまったり、反対に、教室での経験や現象を、細分化し、要素に還元しないことである。むしろ、教師の経験が複雑で全体的な営みであること、そして、その経験を教師自身が言語によって意味づけし、自己や他者との対話の中で理解を深化させることが重要である。自らの経験や実践を対象化していく過程で、自分自身の理解や解釈に、様々な信念や理論が入り交じっており、時おり経験するコンフリクトそういった理由から発生していることに気づくことが重要となる。教室での現象や経験に対する教師自身の解釈は、教師の知識や信念によって支えられているが、そういった知識や信念が具体的にどのように構成されているか、あるいは、文化的な媒介物(cultural artifacts)によって知識や信念の形成が支えられているかも明らかにすることも重要である。

第二言語および外国語教師のナラティブ研究としては、Johnson & Glombek (2002)、Johnson (2007)などがある。Johnson (2007)は、教師のナラティブ分析の視点として以下の5

つをあげている。それらは、1) 教師の内的な変容、2) 教師の学びを支える文化的媒介物、3) 教師の学びを持続させる要因、4) 今日の中に起こった変容が与える授業への影響、さらに、5) 教師の学びが与える生徒の学習への影響といった項目である。

② ナラティブ・アプローチによるポートフォリオの分析

上記の議論に基づき、上述した紙版と電子版のポートフォリオに蓄積されたナラティブ・データを分析した。その結果、以下のようことが明らかになった。

○ 教師は、マインドマッピングなどにより視覚化したり、メタファーを使用したりすることで、自らの経験や知識を対象化することができる。

○ 経験や知識を対象化することで、新たな知を生み出すきっかけをつかむことができるが、しかし、実践の新しい変化や新たな試みを阻む現実の教室での葛藤を描写できる。

○ 自らの経験を対象化し、実践に対する理解を深化させる際に、専門知である理論をそのまま受容せず、常にクリティカルに見る姿勢が形成される。これによって実践を見つめる新たなレンズを獲得し、実践を変化させるための第一歩を構想できる。

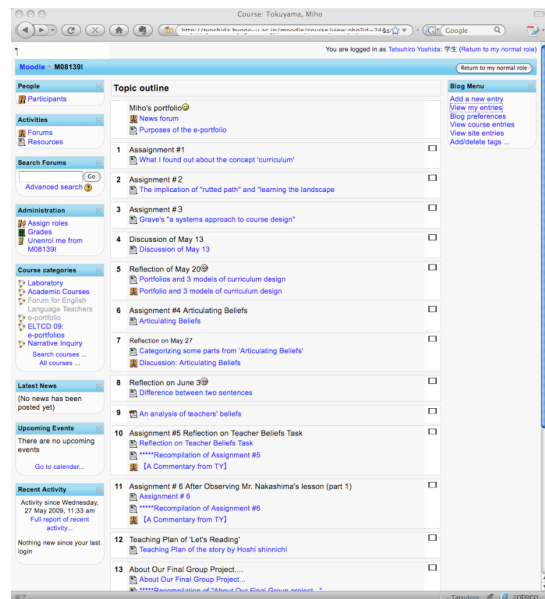


図2 電子ポートフォリオ

○ さらに、電子版ポートフォリオの特徴として、ポートフォリオにアップロードしたエントリーを巡って学生と担当教員が、対話を行うことができるため、学生自身の内省が深まり、経験や実践の変容をトレースしやすいということがわかった。自らの学びの経験を言語化し、文章に綴るという作業は、紙版であるが、電子版であるが、簡単な作業ではなく、取り組んだ学生もかなりの時間と労力

を注いでいたことが、あとの聴き取りからわかった。しかし、同時に、それまでの教師生活の中では、生まれてこなかった気付きや、知識として学んでいた理論が、自分の経験と照らし合わせて納得できたり、逆に、批判的に眺めることが可能になったこともあきらかになった。

(4) 本研究の成果の位置づけとインパクト

本研究で取り組んだ社会文化的アプローチによる教師教育研究は、海外では一つの流れを作りつつあるが、わが国での認知度はまだ低い。しかし、本研究を契機に、学会でも質的な英語教育研究を育て、本来的に英語教育研究が取り組む課題、そして、その方法論にはどのような者があるかということをも再考する機運が育ってきている。また、本研究では、取組の一つとして、平成19年3月にペンシルバニア州立大学のKaren E. Johnson教授を招き、ナラティブ・アプローチに関するワークショップを行い、60名ほどの参加者があった。このような研究の動向は、わが国の英語教師教育研究のあり方にも確実にインパクトを与えている。今後、教師の学びや成長の支援と、ポートフォリオといった成長の場の開発を行いつつ、方法論の精緻化を進めながらさらに豊かな研究成果を導きたい。

(5) 引用文献

- Allwright, D. 2003. Exploratory Practice: rethinking practitioner research in language teaching. *Language Teaching Research*, Vol. 7, No. 2, 113-141.
- Clandinin, D.J. & Connelly, F.M. 2000. *Narrative Inquiry: Experience and Story in Qualitative Research*. Jossey-Bass Publishers.
- Freeman, D. 1998. *Doing Teacher-Research: From Inquiry to Understanding*. Heinle & Heinle.
- フレイレ, パウロ. 1979. 『被抑圧者の教育学』 亜紀書房.
- Johnson, K.E. 2000. Innovations in TESOL Teacher Education: A Quiet Revolution. In K.E. Johnson (Ed.) *Teacher Education. Teachers of English Speakers to Other Languages*.
- Johnson, K.E. 2007. The sociocultural turn and its challenges for second language teacher education. *TESOL Quarterly*, vol.40, 1: 235-258.
- Johnson, K.E. 2007. Tracing teacher and student learning in teacher-authored narratives. *Teacher Development*, vol.11: 175-188.
- Johnson, K.E. & Glombek, P. (Eds.) 2002. *Teachers' Narrative Inquiry as Professional Development*. Cambridge University Press.
- Sharkey, J. and Johnson, K.E. (Eds.) 2003. *The*

TESOL Quarterly Dialogues: Rethinking Issues of Language, Culture, and Power. Teachers of English Speakers to Other Languages.

Woods, D. 1996. *Teacher cognition in language teaching: Beliefs, decision-making, and classroom practice*. Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

- ① 吉田達弘. *Japanese EFL teachers' professional development through the use of Moodle in a graduate course*. AILA 2008 (国際応用言語学協会・2009年8月28日国際会議). ドイツ・エッセン・国際コンベンションセンター.
- ② 吉田達弘. 「ナラティブ・アプローチによる英語教師教育研究」 第34回全国英語教育学会東京研究大会. 平成20年8月9日. 昭和女子大学.
- ③ 吉田達弘. 「英語科教師の学びの研究：理論と実践の対立から praxis へ」. 第33回全国英語教育学会 大分研究大会. 平成19年8月5日. 大分大学.
- ④ 吉田達弘. 「英語教師教育における社会文化的転回の可能性」 第11回関西英語教育学会. 平成19年5月27日. 摂南大学.

[図書] (計1件)

- ① 吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介著. 2009年(近刊)『ダイナミックな英語教育』ひつじ書房.(第3章3節「英語教育実践の現場に研究者が関わることの意味：教師の成長と研究者の成長」p.265～306).

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉田 達弘 (YOSHIDA TATSUHIRO)
兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号：10240293

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし